



# 真の自己と仮の自己 : 出発期の平塚らいてうを読み解く一視点

大家, 慎也

---

**(Citation)**

21世紀倫理創成研究, 5:87-103

**(Issue Date)**

2012-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/81003894>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003894>



# 真の自己と仮の自己 —出発期の平塚らいてうを読み解く— 一視点—

大家慎也

## はじめに

近年、平塚らいてう研究は大いに発展し、彼女の活動はその思想家・文筆家としての出発期<sup>(1)</sup>を含めてかなり判明になりつつある。しかし彼女の出発期の思想、特に「太陽」、「天才」、「真正の人」という一組になった概念の関係性と意味については、明確に検討されていないように思われる。これらを明らかにすることは、文学史や日本思想史、あるいは作品研究的な文学研究への寄与となるであろう。また、彼女が当時掲げていたフェミニズム的主張の意義を再考する契機ともなり、応用倫理学的な重要性をも持つであろう。

そこで本論は、彼女の出発期の思索、特に明治 45 年（大正元年）頃までの思索を検討し、当時の彼女が持っていた思想を、「真の自己」と「仮の自己」という二つの自己概念から読み解く視座を提示する。

第一章にて、太陽、天才、真正の人という三つの概念が、自発性と自己表現という性質を共有する点において関係していたことを示す。その上で、これらの概念が、核心において、真の自己と仮の自己という一組になった自己概念を説明するものであったことを示す。真の自己とは精神の内奥に定置された核としての自己であり、自発し、自己表現する性質を持つ。これが周囲の環境に合わせて表現された姿が仮の自己である。この二つの自己観こそ、出発期らいてうの中心的思想であった。

次いで第二章では、この二つの自己が他者関係に置かれた場合、他者に影響され、依存する危険性を持っていたことを示す。この問題は、後に彼女が被る社会性の欠如という批判を予告するものであり、彼女の出発期思想が突き当たった一つの限界と言える。

## 1. らいてうと二つの自己概念

### 1-1. 太陽、天才、真正の人

出発期のらいてうを特徴づける概念といえば、太陽、天才、真正の人が挙げられる。らいてうはこれらを自らの処女エッセー「元始女性は太陽であった——『青鞥』

発刊に際して——」（明治 44 年、以降「元始」）において登場させ、その後も時に表現をアレンジしつつ使用している。「元始」の冒頭は、よく知られた「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。／今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である」<sup>(2)</sup>というものである。一般的に、この文章は他者（特に男性）の力によって生かされる女性像ではなく、自己自身の力によって生きる、来るべき自立した女性像を賛美しているとされている。すなわち、かつて自ら光熱を放っていた太陽（女性）は、今や他者に照らされ光るだけの月として生きている。太陽としての自己を回復せよ——というわけである。

さて、先の引用では太陽と真正の人が同じものとされていた。それでは、天才はどこに見られるだろうか。例えば数頁の後、「私は精神集中のただ中に天才を求めようと思う。／天才とは神秘そのものである。真正の人である」<sup>(3)</sup>とある。ここで天才は先の真正の人と言い換えられている。またその数頁後では、「自らの溢れる光輝と、温熱によって全世界を照覧し、万物を成育する太陽は天才なるかな。真正の人なるかな」<sup>(4)</sup>として三つの概念が結ばれている。これらの箇所以外にも、「元始」の至る所で三つの概念は結びつけられており、一読すれば、らいてうが太陽＝天才＝真正の人としてこれら概念を等号関係に置いていたことが解る。

しかし、よく考えると、これらはすべて別々の概念ではないか。例えば直近の引用では、太陽が自らの光と熱によって全世界を照らし、万物を育むと書かれていた。恒星太陽の描写としてこれは納得できるが、何故それがすなわち天才と言え、また真正の人と言えるのか。ここで我々は、らいてうがこれら三つの概念に、何か共通する特殊な意味を込めていることに気づかされる。以降では、その特殊な意味を見出し、吟味しよう。

## 1-2. 自らを噴出させ、燃焼させるもの——太陽

冒頭で見たとおり、「元始」における太陽は元始の太陽としての女性像を示し、今（当時）の世の女性像と対置されている。このことは本文中で繰り返される「元始、女性は太陽であった」「今、女性は月である」という対比からも間違いない。

しかし、この対比が歴史的社会的な女性研究に基づく対比——例えば元始母系制の主体的女性像と家父長制における隷属的女性像の対比——であったと理解することは、明らかな短絡である。例えばらいてう自身が、後年出版された自伝にて、

## 真の自己と仮の自己

「元始」執筆当時を振り返り、次のように述べている。すなわち、元始の太陽という女性像は、社会における女性の地位を歴史的に考察した上で着想されたものではなく、単に「婦人雑誌の発刊の言葉を書かねばならないという必要に迫られた」「直観的」な表現であった、と<sup>(5)</sup>。実際、「元始」が古代母系制という歴史的な文脈の中で解釈されるようになった動向は、高群逸枝の女性史研究以降のことであった<sup>(6)</sup>。さりとて、元始の太陽という表現が意味を欠いたものであると言うことはできない。たとえそれが直観的に着想された表現であったとしても、そこには彼女自身の思考が反映されているだろう。

中山和子は、この太陽の表現を鬱積した思いの爆発であるとする。彼女によれば、元始の太陽という表現は「女性のもつ本来の能力が、環境や道徳の重圧に押しひしがれている、その不合理、不条理にたいする不満をもちながら、どう出口を求めてよいかわからずにいたものが、一挙にふきだしたときの言葉であろう。『太陽』のイメージはそうした激情と燃焼力とにふさわしいともいえる」<sup>(7)</sup>。さしあたり、太陽になぞらえられる女性本来の能力とその抑圧された形態としての月という対比は納得のいくものである。しかし中山の議論は、太陽のイメージの解釈に関しては、曖昧さを残していると言わざるを得ない。というのも、太陽の持つイメージは確かに激情や燃焼力にふさわしいが、しかしこれらをすべて、抑圧とそれに対する反発現象に還元してしまえるだろうか。むしろ、次のように言うことも可能であろう。つまり、恒星太陽の激情とは自らを噴出させる激情であり、その燃焼力は自らを燃焼させる燃焼力ではないか。その証拠に、「元始」の太陽と対置されているものは、自ら熱を発して輝くことができず、他の光によって輝く蒼白い月なのである。

すると「元始」の太陽とは、まづもって自らを燃焼させる自発性の太陽であり、また自らを噴出させる、すなわち外部へと表現する太陽であると仮定することができる。こうした性質が太陽という概念に担わされており、らいてうが思い描いた元始の女性とは、自発し自己表現する女性だったのではないだろうか。ひとまず、このような仮定の下で議論を進めてみたい。

### 1-3. 自発し、自己表現する真の自己——真正の人

ところで、らいてうにおける自発性と自己表現という性質について、佐々木英昭が「過剰」なエネルギーの形象に着目して研究している。過剰なエネルギーの形象

は、例えば「元始」では「過剰な精神力」として<sup>(8)</sup>、また自伝において「過剰精力」<sup>(9)</sup>、「内部にあふれるような力の充実」<sup>(10)</sup>などと表現されている。ちなみにらいてうは、この過剰なエネルギーを、禅の修行を通して実感された心身充溢のエネルギーであるとしている。彼女は日本女子大の在学中、日暮里・両忘庵の釈宗活老師に就いて、臨済禅の修行を行った。一年あまりの参禅経験の果てに、彼女は見性（禅宗における悟り）を許されることとなる。明治39年の夏のことである。その時の様子について、らいてうは自伝にて以下のように書いている。

わたくしは生まれかわったのでした。第一の誕生は、わたくし自身は知らないわたくしの肉体の誕生でしたが、第二のこの誕生は、わたくし自身の努力による、内観を通して、意識の最下層の深みから生まれ出た真実の自分、本当の自分なのでした。<sup>(11)</sup>

考えてみると、この時分が、一生を通じていちばん生命力の充実した最高潮の精神的次元に生きていた時期だったように思われます。／心は透明に澄み切り、無限大にひろがっていますし、からだはあってもなきが如くで、不思議なほど身軽ですし、疲れというものをまったく感じないのです。<sup>(12)</sup>

すなわち、らいてうは参禅を通して真実の・本当の自分を発見し、そこから活力が溢れてくることを体感したという。もともとそこにあったが、その存在に気づくことのなかったもの——すなわち真実の・本当の自分の存在こそが、彼女が参禅の果てに見出したものであり、この発見は彼女にとって新たに生まれ直すような衝撃であった。

さて、この第二の誕生は過剰な精神力をらいてうにもたらし、彼女のライフスタイルを大きく変えた。すなわち、佐々木の言詞を借りれば、「この爆発的パワーは、それまで狭い領域に限られていた明子〔らいてう〕の関心を無限に拡がらせ、興味の赴くままあらゆることに首を突っ込ませた」のである<sup>(13)</sup>。実際、見性後のらいてうは、当時の慣習や規則から軽やかに逃れ、時には際どい振る舞いでそれらの束縛を逆撫でしさえした。有名なところでは浅草海禅寺の若き僧、中原秀岳との騒動がある。このようなことは単なる若気の至りと解釈することもできようが、しかしそ

## 真の自己と仮の自己

れ以上に注目すべきは、当時の彼女が真実の・本当の自分を発見したと強く実感していたことであり、その実感が実際に彼女を具体的活動へと突き動かしたということであろう。自伝や当時の書き物には、彼女がそのことを自覚していたことが窺われる文章が散見される。これを先の太陽の自発と自己表現に結びつけると、らいてうの見出した真実の・本当の自分は、自発的なエネルギーとなり、彼女を積極的な行動へと駆り立てたと言える。換言すれば自発性が具体的な活動力として表現されたのである。自発と自己表現という性質は、ここにおいても見出すことができる。

ところで、佐々木はもう一つ重要な示唆をしている。それは、らいてうの見出した真実の・本当の自分が、彼女自身の禅修行の過程において「無位の真人」「(父母未生以前の) 本来の面目」(『臨濟録』)という用語で示されているということである<sup>(14)</sup>。実際、出発期のらいてうの文章中には、禅用語を意識した表現がかなり多く見られる。この「真(の)人」、「本来の面目(顔・あり方)」という文言に、「真正の人」という言葉との響き合いを見出すことは容易い。このように考えると、らいてうが真実の・本当の自分=真正の人という概念を禅用語から翻案したと理解できる。

つまり、らいてうのいう真正の人とは、禅修行の果てに見出された真実の・本当の自分を指す。言い換えれば、らいてうは参禅経験を通じて真正の人という特殊な自己の概念を構築し、これに自発的なエネルギーとして自らを表現するという性質を付与したのである。以降ではこの自己概念を「真の自己」と略記する。

### 1.4. あらゆる自己表現の可能性——天才

この節では、先に見た真の自己の自発性と自己表現という性質について、もう少し掘り下げて考えてみよう。自発的なエネルギーが具体的な形で表現されるということは、人間が具体的な他者関係や社会関係において生きることと関連して、いかに論じることができるだろうか。そのために、らいてうの記述に現れるもう一つの自己概念、すなわち「仮の自己」に着目してみよう。これら二つの自己概念は「元始」とほぼ同時期の文章にいくつか登場している。

例えば、彼女がイプセンの戯曲『人形の家』のヒロイン、ノラに対して示した手厳しい批判を見てみよう。作中で、夫に溺愛されて生きてきたノラは、最終的に、夫の愛が彼女を一人の人間として愛するものではなく、一緒に遊ぶ人形に向けられるものであったと気づく。そして彼女は、本当の人間になるために、夫と子供を置

いて一人で家を出るのである。この戯曲に対して、他の青鞥の作家たちは概してノラに好意的であったが、らいてうは唯一人、「ノラさんに」(明治45年)というエッセーで仮借ない批判を加えている。

ノラさん、あなたは何よりか第一に私は人間ですとおっしゃって、「人形の家」をお捨てになった。けれどもあなたは人間になったのではありません。何でも人間にならねばならぬ、とやっとなげられただけです。(15)

[あなたは]「全体自分とは何だろう」と内に向かってお尋ねにならずにはいられなくなるでしょう。そしてあなたは何を発見なさるでしょうか。それは今まで自分自分と思っていたものが、虚偽の自分、幻影の自分であったということです。そのまぼろしの自分のために真の自分が隠されていたということです。

(16)

すなわち、らいてうにとって、ノラは人形の家とそこにいた虚偽の自分を捨てただけに過ぎない。まだ人間＝真の自分を見出し、これになることが出来ていないのである。一見すると趣旨が分りづらいが、米田佐代子の指摘に従えば、らいてうのこの激しい拒絶は、ノラが結局のところ「夫の愛や誠実さといった外在的な要因のみを問題にしている(とらいてうは考えた)ことへの批判として見れば理解できる」(17)。らいてうが批判していたのは、夫からの真実の愛や一人の人間として見てもらうことなどといった、外的要因を気にかけることに終始するノラの態度であった。ここで、らいてうが外的関係における自分、すなわち虚偽の自分を完全に捨て去れと要求しているわけではないことに注意しよう。虚偽の自分が無価値なものだとは、らいてうは言っていない。彼女の要点はむしろ、人間性を求めるならば、虚偽の自分に隠されている真の自分にこそ求めるべきだということである。「ノラさんに」において、真の自分は虚偽の自分と対置させられ、後者よりも前者のほうが本質的とされている。

この二つの自己概念は「元始」にも登場する。以下を見てみよう。

男性といい、女性という性的差別は精神集注の階段において中層ないし下層

## 真の自己と仮の自己

の我、死すべく、滅ぶべき仮現の我に属するもの〔であり〕、最上層の我、不死不滅の真我においてはありようもない。<sup>(18)</sup>

らいてうが言うには、男性や女性といった区別は、仮現の我に属するもの、すなわち仮の現れとしての自己の属性であり、それを超えた最上層には、性差を超越した真の我がある。少なくとも、当時のらいてうにとっては、男性や女性といった属性は仮現、つまり仮に現れた副次的なものであり、自己の最内面に存する真我が主要な関心であったと見える。

さて、これらの人間や真の自分、また真我などは、真正の人のヴァリエーションと考えられる。その根本にあるのは禅修行の果てに見出された真の自己であろう。また、虚偽の自分や仮現の我とは、真の自己に対立する「仮の自己」として要約できよう。さて、筆者は一つの問いを提出し、そのことで自発性と自己表現という性質について、もう少し掘り下げて考えたい。真の自己と仮の自己とは、どのような意味を持つ二分割であり、そこにはどのような関係があるのだろうか。言い換えれば、真の自己の立場を取るにより、何が果たされるとらいてうは考えているのだろうか。

ここで理解の助けに天才概念に注目したい。ただし、内容を明確に理解するため、「元始」における論述を順に追ってゆこう。

まず天才は、真正の人について述べる文章に現れる。「私は精神集中のただ中に天才を求めようと思う。／天才とは神秘そのものである。真正の人である。／天才は男性にあらざ、女性にあらざ」<sup>(19)</sup>。ここで天才は真正の人と同じものとして描かれている。すなわち天才とは、精神集中（禅修行を彷彿とさせる）のうちで見出される神秘であり、真正の人＝真の自己である。また、ここで天才が、先に見た真我に同じく性的区別のないものとされていることにも留意したい。らいてうにとって、天才とは性差などといった属性の以前にあるものなのである。

次いで、天才は太陽とも同等のものとして書かれる。つまり「私どもは隠されてしまった我が太陽を今や取り戻さねばならぬ。／『隠れたる我が太陽を、潜める天才を発現せよ』」<sup>(20)</sup>。さて、ここで注意すべきは、太陽＝天才が隠されてしまったもの、潜めるものとされていることである。当時のらいてうにとって、この一組の

概念は現在の私ども(女性たち)にとって現れることができていない。だからこそ、彼女の言葉は「発現せよ」という命令形をとる。しかし潜在する太陽＝天才が発現するとは、いかなる事態であろうか。

それに応える文章が、例えば以下の文章である。「私ども女性もまた一人残らず潜める天才だ。天才の可能性だ。可能性はやがて実際の事実と変ずるに相違ない」<sup>(21)</sup>。可能性として存在する天才が、実際の事実となること——らいてうは、天才の発現をこのように描いている。さて、この天才の可能性が実際の事実へと変ずるという点に関して、岩淵宏子の研究は非常に興味深い。岩淵は、らいてうの天才概念が、日本女子大学校時代の恩師、成瀬仁蔵から受け継がれたものであることを論述した上で、この概念が同じく成瀬の「天職の全う」という概念と併せて理解されるべきだと示唆している<sup>(22)</sup>。すなわち、成瀬において、「高等教育を受けた女性は各自適材適所にて『天職』を全うして、他の多くの女性のモデルになる生き方をするを囑望」されていた<sup>(23)</sup>。このような自己実現が果たされるのは、「自修自奮」「自ら励み自ら研究スル」「自発、自動」「自ら勞し、自ら働く」といった「自立的・主体的な生き方」による<sup>(24)</sup>のであって、その根本には「一つの潜伏力」すなわち潜在能力でありながらも、「努力の力強きもの」すなわち努力の成果として現れる、天才概念があるのである<sup>(25)</sup>。この文脈に沿えば、らいてうの言う可能性(天才)が実際の事実と変ずることとは、あたかも潜伏している天才が天職として全うされるように、可能性が具体的なあり方として自己実現することであると見えよう。天才とは、具体的な自己実現を可能にする、自己の可能性の核なのである。

ただし、らいてうは成瀬の天才概念をただ受け継ぐだけでなく、よりラディカルに再構成しているよう思われる。というのも、らいてうは適材適所や(一つの)天職という束縛や限定を超えて、人が様々な文脈で自由に自己を表現できることを考えていた節がある。その例が、先に見た「元始」における性差についての彼女の考えである。「元始」を貫く認識は、当時の女性を取りまく状況が、彼女たちの真の自己を表現できなくさせているというものである。女性たちの女性性自体すら、良妻賢母という限定的な、そして多分に抑圧的な形式において理解されていた。だからこそ、男性や女性といった性差以前の場所から考え直す必要があったのである。その意味で、天才はニュートラルな性——すなわち女性として、または男性として表現されうる、未だ性別化されざる性——でもあった。ジェンダー(社会的に作られ

## 真の自己と仮の自己

た性差)という概念が存在しなかった当時、このような発想は極めて進歩的であったと言える。この点について、我々は彼女が当時掲げていたフェミニズムの主張の意味を確認することができる。彼女は実に、この天才という概念を用いて、当時の女性の女性性を、そしてその実存を再考しようと試みていたのである。

以上から、らいてうが天才という概念に負わせた意味も明確になる。彼女にとって、天才とは、仮の自己の奥底にある真の自己であった。この真の自己は時宜に応じて自らを発現し、仮に現れる自己として表出させる。その結果、その人間の実際の、具体的なあり方が決定されるのである。このことを先の太陽と真正の人で確認した、エネルギーの自発性および自己表現という性質と重ねて理解すると、真の自己が発するエネルギーが、活動的な自己として実現したと解釈できる。自発的なエネルギーの表れと、周囲の文脈における自己実現とは、同じ事態の二側面なのである。

### 1.4. まとめ

まとめよう。太陽、天才、真正の人の概念は、自発性と自己表現という性質を持つ自己概念である点において共通している。すなわち真の自己は、周囲の環境に合わせた具体的な表現として仮の自己に結実するのである。以上により、出発期のらいてうは、自発し、自己表現する二つの自己の思想を持っていたと結論づけることができた<sup>(26)</sup>。

さて後半では、煤煙事件と呼ばれる事件の分析を通して、らいてうの二つの自己の関係をより深く見てゆきたい。これにより、彼女の自己概念が他者という外的要因との関係に置かれた場合、その主体性・能動性を喪失し、客体性・受動性の自己へと変貌するリスクを秘めていたことが明らかになる。このリスクは、彼女の出発期思想が突き当たった、一つの限界を明らかにするものである。

## 2. 自己の外部とのインタラクション——同化のメカニズム

### 2-1. 煤煙事件

見性から二年が過ぎる頃、らいてうはセンセーショナルな事件を起こして衆目を集めることとなる。これこそ煤煙事件(塩原事件とも)と呼ばれる、夏目漱石門下

の若き文学青年、森田草平との心中未遂事件である。閨秀文学会という文学講習会の講師と生徒として出会った二人は、交際の果てに心中を決意し、出奔した。しかし失踪から三日目に、雪の残る塩原温泉郷の尾頭峠にて二人は無事保護された。明治41年3月24日、当時らいてうは満22歳、森田は27歳であった。その後、森田は漱石の薦めによって、この事件に取材した小説『煤煙』を朝日新聞に連載（明治42年）し、文壇デビューを果たした。以上の顛末をもってこの事件は煤煙事件と呼ばれる。もっとも、この事件は単なる情死未遂事件として処理するにはあまりに不可解な点が幾つもあり、論は尽きないのであるが、残念ながら本論では割愛せざるを得ない。

らいてうと森田との交際関係は非常に奇妙なものだったようである。まず明治41年のはじめに、二人は講師と生徒という枠を超えて接近を始めるが、その後、二か月余りで心中劇にまで至る。この展開の急激さもさることながら、どうやら二人は最後まで相互理解に至ることがなかった。森田はひたすららいてうの真意を測り、これを理解し、彼女を手に入れようとする。一方でらいてうは森田本人よりもむしろ自らの自意識のあり方に執心していた。このような対比は『煤煙』によく描かれており、一木朋子の示唆によれば、「要吉〔作中の森田〕が朋子〔作中のらいてう〕に悩まされたのに対して朋子は自分の自意識との闘いに悩まされてきたといえる」<sup>(27)</sup>。二人の交際は決して交わることのない奇妙な交際だったのである。

さて、らいてうは実際に森田とどのように向き合っていたのだろうか。煤煙事件の顛末を見てみると、我々は興味深い点を発見する。それは、森田とのインタラクションにおけるらいてうの行動が、多分に森田に影響され、引きずられるかたちのものであった点である。らいてうを手に入れようと誘い出す森田に対し、らいてうは目に見えて従順である。相手に誘われるままに振る舞い、付き従う。森田が死の美学を語ればそれに同調し、「私は先生の御手にかかって死ぬ——殺して頂く」<sup>(28)</sup>と自らの身を投げ出す。ここに我々は不可解さを感じずにはいられない。先の章で見たように、らいてう本人の思想は、真の自己が時宜に応じて仮の自己として発現するという、自己の主體的・能動的な面を強調するものであった。しかし、それにも関わらず、彼女の実際の行動はむしろ客體的・受動的な色彩が強いのである。

## 2-2. 同化における自己

この問題は単なる言行不一致として片づけられてはならない。何故なら、よく言われるように、らいてうは自らの思想を実践し、その思想を生きていたからである。実践思想家としての彼女の思想は、煤煙事件の中にも見出すことができ、またそうする必要がある。

煤煙事件とらいてうの思想を繋ぐものは、らいてう自身の発した「同化」という言葉である。この言葉は「小説に描かれたるモデルの感想」（明治43年、以降「感想」）<sup>(29)</sup>として『新潮』に掲載されたインタビュー記事に見ることができる。記事のなかで、らいてうは、森田が結局自分のことを理解しておらず、小説に表現できていないとし、以下のように述べている。

私は相手の態度と、その時の心持で、上下左右何（ど）うにでも変る人間です、物に触れ、事に応じて、それに同化して予（しま）うのです。無論、無智なる人が物に対して夢中になるのとは違います。又、今頃能（よ）く言われる自覚だとか覚めたとか云う、そんな意味でもありません。[.....] その[自覚の]上に今一つ無為——と云うと語弊がありますが——の、状態になって物その物に直ちに同化して予いながら、而も自らそれを見得る余裕のあつて存する[.....] 本当の芸術家は其処に到らなければ可（い）けないと信じます。<sup>(30)</sup>

すなわちらいてうは、物に触れ、事に応じて、それら物事に沿ったかたちで自己を同化させることこそ、自らの為したことであり、その上で無為（禅における永遠不変の真理）の状態になり、この同化をも客観視することが肝要だと言っている。「本当の意味の客観は、物に同化しながら而もその間に余裕があつて自ら観（み）得る、其場合にのみ出来ることでしょう」<sup>(31)</sup>。だから、彼女の内面を理解しなかった森田は、「真の私が掴めないで非常に焦心された様でした。御自分の態度に依って私が変わって居るのだとはお気が付かれないで」<sup>(32)</sup>として冷やかされている。

以上の文章は明らかに、先に見た真の自己と仮の自己の関係を、同化というメカニズムで説明しようと試みている。つまり他者との同化の結果として仮の自己が出現するのであり、らいてう自身の仮の自己は、森田の振る舞いに即してその都度姿を変えて表現されたのだ、と。煤煙事件は実に、二つの自己概念の実践の場でもあ

ったのである。

しかし、この同化のメカニズムは、二つの自己概念が持つ問題点をも示しているように思われる。というのも仮の自己は、物に触れ、事に応じて、言い換えれば周囲の他者関係の文脈に同化するかたちでしか表現されない。すなわち他者に対して原理的に依存関係にある。すると、同化の結果として表現されたこの自己は、他者に対する付和雷同に随し、所与の状況や条件に振り回される危険性を持つと言えないだろうか。実際にらいてうは森田に引きずられるままに雪山まで赴き、殺される一歩手前にまで至ったのである。

この問題点については、適切にもらいてう自身が『青鞥』第3号の「編集後の雑感想」(明治44年)において指摘している。彼女は一方で、「主我的状態」と「非主我的状態」、すなわち自己がエゴイスティックに自らに執着する状態とこれを脱した状態について論じた後、「受動的、無抵抗の非主我的状態」が「やはり我々の最後の落ち着きどころであると信じ」<sup>(33)</sup>と書く。ここで想定されているのは、明らかに、同化における無為の境地として彼女自身が述べる状態であり、その状態における受動性と無抵抗は正面から称揚されている。しかし直後に、彼女は次のような危惧も表している。

しかしこの最後の非主我的境地の福音が直(ちよく)に今日の日本の女に向って説かれる時、何らの価値なきものとなるばかりか、かえって悪魔の声となり、自覚なき以前の受動的態度となり終りはせぬかということを恐れるのです。

(34)

らいてうはここで端的に、自らの自己概念が単なる客体性・受動性に陥ることを危ぶんでいる。自覚を欠いた非主我的境地は、無価値であるばかりか、人間が意志なき操り人形となる悪魔的状况であるかもしれない。だからこそらいてうは自覚、すなわち「余裕があつて自ら観得る」(「感想」)ことの重要性を説くのである。ここにおいて、らいてうは真の自己をある種の反省の極として捉えていると考えられる。真の自己は仮の自己として発現し、周囲の文脈のうちで振る舞いつつも、同時にその行為を常に観察対象とし、反省しているのである。非主我的境地＝無為の境地は、それをモニターするところの反省する自己、すなわち余裕を持って観る自己、自覚

## 真の自己と仮の自己

的自己を必要条件とする——らいてうはこのようにして、自らの自己概念の脆弱性を補強しようと試みている。

しかし、ここで注意せねばならないことは、らいてうの自己概念の場合、真の自己の反省と仮の自己の発現とが相互に関係を持たないということである。真の自己は人間の精神世界のうちに座し、仮の自己が具体的な生活において時宜に応じて発現するのをただ見ている。このとき、真の自己と仮の自己のあいだで、相互のフィードバックは不可能である。すなわち、真の自己の反省が仮の自己の発現の仕方に影響することはないし、また仮の自己のあり方をうけて真の自己が自らのあり方を変革することもない。これは考えてみれば当然のことで、らいてうにとって一番重要だったことは、外的な仮の自己とは独立して内的な真の自己が存するという事であり、これに気づき、目を向けることだったからである。そこには、周囲の環境における自己と自らにとっての自己とを区別するという興味深い発想こそあれ、二つの自己が対話的にフィードバックすることへの洞察が欠けており、双方が自己批判的に自らのあり方を変革する可能性も閉ざされている。だからこそ、森田との交際のなかで、らいてうは本人いわくの無為の境地においては自覚的であったが、実際の対人関係においては相手に依存し、客体となり、受動的であった。真の自己の反省は、森田とのインタラクションに関与することができなかつたのである。

実に、真の自己と仮の自己のあいだには、双方の対話の可能性を閉ざす一つの断絶があった。この断絶とは、そのまま他者や社会といった自己の外部と精神世界という自己の内面を連絡不能なたちで二分する断絶であり、真の自己を内なる傍観者へと、仮の自己を主体性を欠いた人形へと変容させる危険性を秘めていた。以上のことを別の観点から問にするならば、彼女の二つの自己概念とは、具体的な他者関係や社会関係に置かれた場合、いかなる意味を持ちうるのかということになる。そしてまさにこの問いこそ、らいてうが現実社会の婦人問題へのコミットを余儀なくされた際に問われた問いと重なるものであった。『青鞥』発刊よりしばらくの後、らいてうは社会性の欠如という激しい批判を被ることとなる。すなわち、彼女の言説はあまりに抽象的であり、また社会的現実への関わりが稀薄なため、具体的な女性の社会問題に対して力を持たないとされたのである。このような批判の根底にあったものは、突き詰めると、自己の内面と外界との連絡不可能な二分割に対する違和感ではないだろうか。結局、らいてうは批判を受けての思想的な転向を余儀

なくされ、エレン・ケイの母性主義へと傾倒していった<sup>(35)</sup>。すなわち、母性を女性固有の能力であるとし、これを保護し育むことこそ肝要であるとされたのである。彼女のフェミニズムの主張が変容していった背景には、真の自己から母性への重心の移動があった。性差を持たない真の自己は表舞台より姿を消し、母性という一面的な女性性が称揚されることとなった。以上のように見ると、森田という他者に対して客体的・受動的であった煤煙事件の顛末は、二つの自己概念の脆弱性という点で、その後のらいてうの思想を待ち受ける、社会性の欠如という批判を予見するものでもあったと言えるだろう。

真の自己と仮の自己という自己概念の二分割、そして他者や社会との関わりの中で絶えず表現され、変化してゆく仮の自己という観点は、アイデンティティーの複合性という今日的な議論においても、十分に通用する可能性を秘めていると筆者は考える。またジェンダーに類する概念の先取りという点に関しても、評価すべき点が多い。以上により、出発期のらいてうが考察した二つの自己概念は、更なる応用倫理的探求に耐えると筆者は判断する。しかし、らいてうは真の自己の独立性を揚言するあまり、二つの自己間の連関を十分に考察できずに終わった感がある。他者や社会とのインタラクションのなかで、いかに二つの自己が相互にフィードバックを行い、自らのあり方を捉え直しながら、主体的に、能動的に生きることができるのか——このことをらいてうは問うべきだったのではないだろうか。

## おわりに

本論において、らいてうの出発期思想を二つの自己概念から読み解く視座を提示した。すなわち当時の彼女の思想は、真の自己を精神の内奥に定置された核としての自己とし、仮の自己を具体的な他者関係や社会関係に現れ、周囲の環境に合わせて変化する可変的な自己とするものであった。太陽、天才、真正の人という三つの概念は、この二つの自己を表現するべく用いられたものであり、そこには女性が自発的に、様々なかたちで自己表現することの可能性が賭けられていた。

しかし、彼女は仮の自己に対する真の自己の独立性を強調するあまり、これらが相互に対話し、自己批判的に自らを変革する可能性を閉ざしてしまった。このことにより、彼女の自己概念は他者関係に置かれた場合、客体的・受動的になる危険性

## 真の自己と仮の自己

を持つこととなる。煤煙事件の顛末はその証左として読み解くことが可能である。

こう考えると、出発期以降のらいてうの思想的な変化についても、また新しい観点から検討できるように思う。特にこの二つの自己概念が、現実の婦人問題と立ち向かうなかでどのように変化したかについては、また稿を改めて論じてみたい。

### 註

\* 本稿は、「(他者)をめぐる人文学研究会」研究成果報告会(2011年10月26日、於神戸大学文学部)で行った発表「出発期の平塚らいてうにおける主体的自己の思想」の発表原稿に加筆・修正を施したものである。

- (1) 本論では、らいてうがエレン・ケイの母性主義を積極的に取り入れる以前の思想を出発期思想と呼ぶ。
- (2) 『平塚らいてう著作集』第一巻(以降『著作集1』)大月書店、1983年、14頁。強調は筆者。
- (3) 『著作集1』16頁。強調は筆者。
- (4) 同上、18頁。強調は筆者。
- (5) らいてう『元始、女性は太陽であった 上』大月書店、1971年、333-334頁。
- (6) 高群逸枝『高群逸枝全集第4巻 女性の歴史一』理論社、1966年、9-10頁。高群はここで初めてらいてうの「元始の太陽」と太陽神アマテラスオホミカミを結び付け、母系制の議論へと接続している。らいてう『元始、女性は太陽であった 完』大月書店、1973年、282頁も参照。
- (7) 中山和子「「女」であることの意味——「青鞜派」をめぐって」、『国文学 解釈と教材の研究』25巻15号、1980年、学燈社、69頁。
- (8) 『著作集1』16頁。
- (9) らいてう、1971年、189頁。
- (10) 同上、211頁。
- (11) 同上、187頁。強調は筆者。
- (12) 同上、189頁。
- (13) 佐々木英昭「死界の太陽——見者平塚らいてう」、『新潮』第90巻12号、1993年、185頁。補足は筆者。

- (14) 同上、182-184頁。
- (15) 『著作集1』82頁。強調は筆者。
- (16) 同上、84頁。強調および補足は筆者。
- (17) 米田佐代子『『青鞥』とその時代』、『『青鞥』を学ぶ人のために』世界思想社、1999年、17頁。
- (18) 『著作集1』16頁。強調および補足は筆者。
- (19) 同上。
- (20) 同上、18頁。
- (21) 同上。
- (22) 岩淵宏子『『青鞥』と日本女子大学校——平塚らいてうと成瀬仁蔵』、『『青鞥』と世界の「新しい女」たち』翰林書房、2011年、20-24頁。
- (23) 同上、22頁。
- (24) 同上。
- (25) 同上、24頁。
- (26) ただし、真／仮の自己という問題設定自体は、洋の東西を問わず、古くから存在するものである。したがって他の思想的伝統との関係と異同についても論じるべきであろうが、紙面の都合で本論では叶わないため、次の機会に譲ろう。ここでは、らいてう本人にとって二つの自己概念がどのような意味を持っていたかに焦点を絞る。
- (27) 一木朋子『『煤煙』研究——「宿命の女」と「新しい女」——』、『日本文学』96号、東京女子大学、2001年、52頁。補足は筆者。
- (28) 森田草平『煤煙』岩波文庫、1940年、250頁。引用文中の仮名づかいは現代のものに改めた。
- (29) 平塚朋子「小説に描かれたるモデルの感想』、『新潮』11巻8号、1910年。ちなみにらいてうの本名は「平塚明(子)」であるが、森田は『煤煙』において彼女を「真鍋朋子」の名で描いた。このインタビューの筆名は、森田の表記を受けた、「我こそ平塚明(らいてう)＝真鍋朋子なり」という身分証明である。
- (30) 同上、68頁。強調および補足は筆者。引用文中の旧字体は新字体に改め、仮名づかひも改めた。以下同。
- (31) 同上。
- (32) 同上。

## 真の自己と仮の自己

- (33) 『著作集 1』 51 頁。
- (34) 同上、52 頁。
- (35) この経緯は、水田珠枝「平塚らいてうの神秘主義（下）——成瀬仁蔵・ドイツ観念論・禅との関連で——」、『思想』第 997 号、2007 年、特に 134-142 頁に詳しい。

(神戸大学大学院人文学研究科・博士課程後期課程)